

平成 27 年度 「臨地実習教育会議」 レポート

3 月 14 日、開学当初より行われている「臨地実習教育会議」が大学で行われました。この会議は、臨地実習施設と看護学部が協同で看護学生を育てるために、実習の振り返りや今後の課題について共有する貴重な機会となっています。県内各地から全体会に 81 名、分科会に 77 名の方が参加してくださいました。

今回のテーマは、近年の在院日数減少などを背景にして地域包括ケアシステムが制度化されたように、「施設・地域間の連携」という社会のニーズに対応できる看護者の基盤を育てるヒントを得ることにしました。そこで、外来や病棟などの多岐にわたる療養環境で実習を行っている領域から話題提供いただき、実習の状況を共有しました。はじめに母性領域からは福島赤十字病院の実習指導者の立場から、妊娠―分娩―産後の一連の流れが体験できるよう、外来と病棟を流動的に往来できるような実習環境を整えていることをお話しいただきました。小児領域からは教員より、社会の動向を受けて入院中の対象者だけではなく、外来に通う子どもたちと接して実習を行う新しい実習方法を取り入れていることが報告されました。精神領域からはまず教員より、地域で暮らす対象者を理解するために、病院だけではなく福祉施設での実習を行っている説明がありました。その後、福島県立矢吹病院の訪問看護やデイケアなどそれぞれの看護師の立場から学生の状況についてお話がありました。これらの発表後の意見交換では、看護学部のそれぞれの専門領域の実習を受け入れてくださっている施設の方から、学生は多くのことを感じ学んでいること、実習を担うことで臨床側も活性化することなどが意見として出されました。

全体会の後には、それぞれの専門領域に分かれて分科会が行われました。社会の動向に合わせて 4 年前よりはじまった新カリキュラムを機に、各実習では新しい方法を取り入れはじめたこともあり、受け入れ施設の方からご意見を伺い、新しい試みをより効果的にするための話し合う時間となりました。現在の学生の特徴を踏まえながら、積極的に具体的な指導方法の提案をしていただき、実習のあり方を共に模索していただいていることを実感しました。

以上のように、施設の方は学生に大きな関心を寄せて実習指導に携わってくださっており、協同して学生を育てるために今後も手を取り合っていただけることを心強く感じた日となりました。

